

欠く様なものがあるなどは聊か遺憾の様に感じた事を最後に附け加へて置き度い、(本田義英)東京小石川區原町六丙午出版社發行、菊版二三一頁、定價壹圓。

現代哲學批判

文學士 村澤喜代人 共譯
文學士 征矢野晃雄

丁抹コッペンハーゲン大學教授ヘフディングの「現代の哲學者」(一九〇四年)及び「アンリベルグソンの哲學、特徴及び批評」(一九一四年)の二書を英譯より重譯し、纏めて一冊としたもので、「現代哲學批判」とは譯者が表題と内容を一致せしめんが爲に、故らに改めた名である。

原著者ヘフディングは一面に於てカントの説を受け精神の本質を「綜合」にありとなすと共に、他面に於て實證哲學、進化論等にも深い同情を寄せ、其の心理學に於ては心身平行論と主意説を取り、倫理學に於ては社會的幸福主義を主張し、各種の問題について頗る廣汎なる興味を有せる著名の學者で、文藝批評家のプランデスと相並んで、現コッペンハーゲン大學の雙壁と稱せられてゐる。著書としては他に「心理學」(一八九〇年)、「倫理學原理論」(一八九六年)、「近世哲學史」(一八九五—九六年)、「倫理學」(一九〇一年)、「宗教哲學」(一九〇二年)、「哲學問題」(一九〇三年)等があり、何れも我が讀書界に歡迎せられ、其の或者は已に邦譯に附せられてゐる。

ヘフディングは種々の理由により、一八八〇年を以て哲學史上の一紀元と認め、茲に「近世哲學史」の筆を絶つた。本書は其の後を承け、氏の哲學上の根本問題と認めた四問題、即ち(一)意識の性

質に關する心理的問題、(二)認識の妥當に關する問題、(三)實在の性質に關する問題、(四)價値の問題が如何に現代の哲學に於て解決せられ又は解決せられつゝあるかを闡明せんと企てたものである。以上四種の問題中第一の心理的問題に對する見解は如何なる哲學に於ても固より主要なる役目を演ずべきであるから暫く之を措き、其の他の三問題に應じて現代哲學の主潮を分かつときは、之を(一)主として實在の問題に思を寄せる組織的傾向(二)認識の問題を中心基調となす認識論的生物學的傾向(三)價値の問題即ち宗教及び倫理を主題とせる價値の哲學の三系統とすることが出来る。ヴント・アルデイゴ・ブラッドレー・フイエー等は第一の派に屬し、マクスウェル・マツハ・ヘルツ・オストワルト・アフエナリウス等は第二の派に屬し、ギユヨー・ニーチエ・オイケン・ゼームス等は第三の代表者である。本書の特徴は譯者も言へる如く、是等多數の哲學者を斯く「分類的に取扱ひ、其の特徴を明らかにし、近世哲學史」と相待ち、文字通りの近世哲學史を完結した點にある。

此の意味に於て本書は「近世哲學史」の姉妹篇とも稱造とも見るべく、單獨に考ふれば現代哲學の一部に對する——敢へて全部とは言はない——好箇の鳥瞰圖である。「近代哲學史」に於て著者の歴史的洞察と批評的見識とに引きつけられ讀者は自ら本書の卓越せる價値を認めざるを得まい。各哲學者中別著として現れたベルグソンを除けば、ギユヨーとニーチエの叙述に——著者自身も斷はつてゐる如く——最も力を致し、オイケン・ゼームスの二氏については其の宗教哲學の一面を精叙するに止り、認識論的生物學的傾向に至りては多少簡約に失せずやとの疑を起さしめる。恐くは

是れ著者自身が特に價値の問題に興味を有せるに基つけるものであらう。又各哲學者に對する批評につきても精粗自ら一ならず、例へばヴントに對しては節々に批評を加へ、始めより評論を目的として筆を探りしにあらざやと思はれる程なるにギュニー・ニーチェ等に對しては簡單に回頗的に評し去るに止めてある。兎に角學說の叙述と、其の批評とが交互に錯綜し、其の間に自ら著者自身の立場を發露せしむる所は本書の長所であると共に又讀者の判斷力に課せられた重い負擔である。

尙譯文について一言を加へたい。凡そ逐字的に譯すれば生硬な齷齪口調となり、自由に譯すれば原著の嚴密性が失はれる、其の何れを取るべきかは一概に論ずべきではないが、余自身としては、文學書の如く、主として情感に訴ふるものの外はなるべく平易な邦語に碎き、凸凹の多い逐字譯よりも、自由な譯し方を選び、邦文でありながら其の意を解するに苦しむやうなことはないこととしたい。本書は併し逐字譯である。逐字譯なるが故に従つて難解に今一息の工夫をと思はるゝ節が極めて多い。全巻を通じてヘルグソンの部分が比較的最も手際よく、同じ逐字譯を取るとしても、あの調子で首尾一貫せられたら、讀者の無益の勞力を如何ばかり軽減するであらうと、遺憾に堪えない。譯語の不適當なるもの亦少くない。例へばブートルの部に於て *equivalence* を「等位」(同一三二頁)と譯し同じ頁に於て同じ語を再び「對當」と譯してあるが、これ寧ろ等價又は等量とすべきで、ブートルの哲學を解する上に於て最も大切な此の語の如きはわけもなく「等位」。「對位」等と種々に譯さるべきでなからう。ドウ、フリースの「變化の

說」(同一三四頁)は固より「突然變異の說」と改むべきで、生物學上 *Theory of Mutation* と言へば現今特に「突然變異說」を指すのである。一六〇頁の視覺論者 (*Visualist*)、動力論者 (*Motivist*) あるいは「視覺典型の人」「運動典型の人」の誤りである。其の他「唯外見上……」(*Only apparently……*)と譯すべきを、唯「明らかに……」とし(同一二八頁)之が爲に前後の文脈を亂した如き不用意の誤謬も時々發見せられる。併し余は茲に譯者の缺點を指摘するを目的とするものでないから、以上の一二の例によつて譯者の注意を喚起するに止めて置かう。余と雖も齷齪譯の事業の如何に困難なるかを知つてゐる、従つて此の好著を我が讀書界に紹介せられた譯者の勞力に對して深大の感謝を捧ぐるに吝なるものでない。斯かる不愉快な例を假りたのは、再版に際し、今一應全部を閲讀するの勞を取られ、不適當なる譯語を改められんことを譯者に望むの念に過ぎない。同時に言在 (*Reality*) (八〇頁) 盡し得ない (*cannot have*) (八七頁) 意中 (*In the air*) (九四頁) 經驗の對象 (*The collection of experiences*) (一六三頁) 悲觀的 (*Pessimism*) (二〇八頁) といふが如き全文の意味を誤らしむるの恐れある誤植を嚴密に訂正せられたら、哲學的氣運の勃興しつゝある今日本書は必ず忠實なる多數讀者の歡迎を受くるにあらう。(定價一圓五十錢、東京橋區目黒書店發行)(篠原助市)

ニーチェ書簡集

和辻 哲郎譯

近來俄に勢を加へて來たトルストイ熱勢の流行と相並んで、之と殆んど對角線的の對立をなすニーチェの思想の、我思想界の一部